



新型コロナウイルスの流行が始まって以降、私たちの生活様式には多くの変化が強いられました。しかし、今ではそのウイルスが生活の一部として定着し、社会はほぼ日常を取り戻したようにみえます。新型コロナウイルス感染症が2類相当から5類感染症に移行してから1年になり、かつては多用された「ポストコロナ」という言葉も、今やほとんど耳にすることはありません。行動制限が次々と撤廃され、病院を離ればマスクなしでの生活が戻ってきています。一時は消滅したかと思われた外国人観光客の姿や、朝夕のラッシュアワーも当たり前の風景として再び受け入れられています。多くの面で日常はコロナ禍以前の状態へと回帰しているようにみえますが、変化した点も多く、それらは新しい日常の一部となっています。

特に、コロナ禍で急激に進んだデジタル化とオンライン化は、大きな影響を残しています。一部では元の対面スタイルに戻ろうという動きもみられますが、オンラインでの業務やイベント、教育が根強く残り、多くが新しい標準として定着しているのです。例えば、ライブイベントや学校教育では対面形式が基本とされることが多いですが、専門家による学会や大学レベルの教育においては、アクセシビリティや柔軟性を提供するためオンラインオプションが推奨され、新たな形態として受け入れられています。当誌の編集委員会は以前からハイブリッド形式で開催され、オンライン参加を可能にしていましたが、多くの委員が週末を利用して東京に集まるのが通例でした。しかし、コロナ禍以降は完全オンライン開催となり、最近では平日開催に変更されました。

また、出版業界におけるデジタル化はコロナ禍以前から始まっていましたが、オープンアクセスの雑誌が増え、研究の意義や特定分野への貢献度ではなく、研究の正確性に焦点をあてて査読がなされる雑誌や、査読前の研究成果を共有するためのプラットフォームなども大きく発展してきました。常温常圧超伝導体と主張された物質が注目された途端、素早い検証で否定されたことは記憶に新しいところです。これらのデジタルプラットフォームの発展に伴い、

研究成果が早期に日の目を見るようになり、論文数が増加し、引用文献が増え、インパクト・ファクターのインフレーションが生じているという指摘もあります。研究者や出版業界が品質評価の指標として、インパクト・ファクターに過度に依存することの問題点も議論されるようになり、より包括的でバランスのとれた評価指標を模索する動きもあります。

最も注目すべき変化は、人間のような情報処理能力をもつAIの出現です。AI技術は大量のデータを学習することで、さまざまな問題への対応能力を発展させてきました。AIを共著者とする研究論文が話題になるなど、学術研究の領域にも革新的な変化をもたらす可能性があります。今のところ、AIを共著者とすることには否定的な意見が主流ですが、AI技術は生活のあらゆる場面に浸透していくでしょうから、研究活動での利用も特別なことではなくなるでしょう。すでに英文校正などにAI技術を利用している研究者も少なくないはずです。当然、査読プロセスにおいてもAI技術の利用が普及していくと思われます。査読者プロセスの効率化が実現すれば、世に出る論文がますます増え、一方で読むべき論文を選ぶ負担も増えていくでしょう。そのための評価指標にもAI技術が利用されるのかもしれませんが、しかし、研究開始からその成果が読者に届くまでのさまざまなプロセスにAI技術が導入されても、真に創造的な活動に対する人類の欲求は決して衰えないはずです。コロナ禍においてmRNAワクチンがワクチン開発のスピードを飛躍的に高めたように、AI技術は創造活動のスピードアップをもたらすのだと思います。

ワクチン開発では遅れをとったわが国ですが、mRNAワクチンの利用には積極的でした。その結果、日本の新型コロナウイルス感染症対策は世界に誇れるものであったと考えます。AI技術についても開発では後塵を拝しているようにみえますが、せめてその利用により人類に貢献できることを願います。

平井伸英